

は し が き

初対面で私に投げかけられる言葉は「なぜまたシンハラ語を勉強されたのですか」という判で押ししたような問いである。これに応えるのは容易いことではないが、私が八歳のとき、シンハラ文字で著された一冊の書物を訪日中であったスリランカ(当時セイロン)の高僧から贈られたことに起因する。その華麗で丸味を帯びたシンハラ文字に魅了された私は、運命の悪戯としか言いようがなさそうだが、過去半世紀に亘る歳月をシンハラ語とシンハラ文学の研究に身を捧げることになった。しかしその道程は長く険しく今なお道半ばであることは否めないが、漸くここに本辞典出版の運びに至った。

シンハラ語はインド・ヨーロッパ語族のインド語派に属する言語でスリランカ民主社会主義共和国の公用語の一つである。人口は約2033万人(2012年 推計)とされ、このうち約72.9パーセントを占めるシンハラ人の母語にあたる。シンハラ文字は紀元前三世紀の中葉、インドで誕生したとされるブラーフミー文字から派生し、最古の文法解説書『シダットゥ・サンガラーワ』(1270~1293) [ウェーデーハ僧 作] が著された頃には、同じ系統に属する言語の文字とはおおいに異なる独特の字体に変容した。とはいえインド系文字の特徴である「子音+母音」が組み合わせられる音節文字に変わりはなく、文字は左から右に向けて書かれ、大文字・小文字の区別はない。

シンハラ語の語順は倒置法などを除けば、主語-目的語-動詞となり、これに日本語の「てにをは」に似た助詞が加わり日本人には学びやすい言語である。また、アクセントも日本語と同様に高低アクセントで発音され、より一層親しみやすい側面を有している。ただ、シンハラ語は口語体と文章体(文語)の差異が甚だしく、これが頭痛の種である。文章体にしか用いられない語法や語彙があり、これらは学習過程において逐次体得する以外に策はない。

現代シンハラ語にはサンスクリット語、パーリ語、ポルトガル語、オランダ語、ヒンディー語、タミル語、マレー語、英語などからの借用語が数多く含まれている。この傾向に対して純粋なシンハラ語の価値を認識させ、権威があるとされる文語の統一化を図ろうと“ヘラ(シンハラ)運動”を起こした人物がいた。彼の名はムニダーサ・クマーラナトゥンガ(1887~1944)で外来語の要素をシンハラ語から排除し、自分たちのアイデンティティの拠りどころとして1941年“ヘラ・ハウラ(シンハラ語グループ)”を結成した。しかし、サンスクリット語やパーリ語を教養がある言葉として最重視してきた仏教系有識者からなる保守派の賛同は得られず、そのヘラ語が普及するには至らなかったという過去の歴史がある。

スリランカは近年グローバル化が急速に進むなか、最後の宗主国であったイギリスの影響が根

強く、公官庁や都市部を中心に英語が橋渡し言語として幅広く普及している。英語教育をさらに推進させるためインターナショナル・スクールも島内各地にできている。2009年5月四半世紀に及んだ政府軍とタミル・イーラム解放の虎(L.T.T.E.)との内戦も終結しインド洋上に浮かぶこの国に明るい未来が訪れ、年々日本人観光客の数が増加してきている。

こうした歴史的・社会的背景のもと、言葉の観点からもう一度見直すと、現地で刊行されている辞書の大半は外国人にとって使いやすく親切であるとは言い難い。そこで本辞書では動詞の活用変化、名詞の数、男女・雄雌の性別、類語、対義語(反意語及びもう少し幅広い意味を有する対立語も含む)や例文をあげ活用範囲を大幅に拡張した。しかし、見出し語の取捨選択の適否、カタカナ表記(カナ発音)のあり方、不測の過誤、誤植などに関しての不備、欠陥はすべて著者の責任であることを明らかにし、叱正を望みたい。

本辞典は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所における文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成(GICAS)」(2001-2005年度, 研究代表:ペーリ・バースカララーオ氏)のプロジェクトの一つである辞書編纂研究会(主査:町田和彦氏)で作られた。出版にあたり、町田和彦教授、シンハラ語データ処理システムを構築し精確な紙面設計をしてくださった同研究所 高島淳教授を筆頭に、数々の助言をくださったスリー・ジャヤワルダナ大学 ラッサシリ・アランガラ教授、東京大学総合研究博物館 元研究員 ウダヤニ・ローサ・ウィーラシンハさん(現 オーストラリア在住)、神戸山手大学 小槻文洋准教授、駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 シンハラ語講師 シリパーラ・ウィーラコーン氏、そして細部にわたり行き届いた指摘、配慮を頂いた三省堂、辞書出版部参事 柳百合氏、シンハラ語入力にご協力頂いた有限会社 久穂の川路さつき氏、さらに長年の知己である浮岳亮仁氏、栢森公子氏、広瀬功氏など多くの関係者の方々にこの場を借りて衷心からの感謝を捧げたい。また、私事ながらこの地味な作業を長年にわたり静かに見守り励ましてくれた妻 インドラーニと娘 珠実にも心から感謝したい。

2015年3月23日

野口忠司